大橋町遺跡第2次発掘調査報告書

新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業（若松Ⅴ）に伴う
埋蔵文書財発掘調査報告書

2007年11月

神戸市教育委員会
序

神戸市長田区は阪神・淡路大震災で最も大きな被害を受けた地域の一つです。震災により歴史を重ねてきた街の風景は失われました。その後の復興再開発事業、区画整理事業に伴い、新しい街の姿が創られつつあります。

街には、記憶に残る風景よりも遠か昔からの人々の生活痕跡が残っています。それらは地面の下に眠っており、発掘調査を通じて皆様方に知っていただくことができます。大橋町遺跡における発掘調査では、およそ2,000年前の弥生時代からこの地域において当時の人々の生活が始まったことが判明し、平安時代〜鎌倉時代には小規模なムラが営まれたことも明らかになりました。

今、地元ではこの地域の歴史を風化させないために、産業、文化に関するさまざまな催しが開かれ、モニュメント製作の実現に向けての努力も続けられています。発掘調査の成果は街がたどって来た歴史を知る上ではたいへん貴重な資料であるとともに、地元の財産となります。こうした発掘調査の成果が、今後の地元の活性化の一助となることを期待します。

最後になりましたが、現地における発掘調査事業の円滑な推進ならびに報告書刊行にご協力いただきました関係諸機関、各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成19年11月

神戸市教育委員会
例 言

1. これは神戸市長田区若松町5丁目において、平成18年4月17日から平成18年6月24日の間で実施した大橋町遺跡第2次
周辺文化財調査事業の報告書である。
2. 調査は新長田駅西第2地区填埋工事として実施されるに伴うもので、神戸市教育委員会、財団法人神戸市体育
協会により実施されたものである。
3. 場所での調査は阿部敏生（1区）、藤井太郎（2・3区）が行い、本報告の作成は藤井太郎が行った。
4. 本報告に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1の地図を用いた『神戸市地図』を、詳細位置図は、
神戸市発行の25,000分の1の地図『大橋・長田港』の一部を使用した。また写真図版には神戸市経済局の航空写
真（長田区OT 4・7・12）を使用した。
5. 本報告で使用した方位は座標北で、その座標は日本測量地図の平面直角座標系である。標高は東京渕中等高線
（T.P.）で表示した。
6. 現地での遺物の写真等については阿部敏生、藤井太郎の撮影を行い、出土遺物写真の撮影は、神戸市埋蔵文化財センター
において独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・牛塚茂氏の撮影指導の下、玉田和樹氏（西大寺フォト）が
行った。
7. 航空写真調査及び第1次調査遺跡範囲図との合成図については株式会社GEOソリューションズに委託した。
8. 出土木製品の植物同定分析をパリオ・サーベイ株式会社に委託した。
9. 遺物の調査は水洗し、検出を神戸市埋蔵文化財センターにおいて実施し、発見の実態、面積の測定は藤井が行った。
10. 本報告にかかわる出土遺物及び面積等の記録は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
11. 発掘調査及び報告書作成は神戸市文化財保護審議会の指導のもと、以下の組織で実施された。

平成18年度

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古担当）

平成18年度（調査業務）

教育委員会事務局

教育長

社会教育長

社会教育事務所

社会教育事務所

社会教育事務所

社会教育部主幹

社会教育部主幹

社会教育部主幹

社会教育部主幹

（財）神戸市体育協会

（財）神戸市埋蔵文化財センター

（財）神戸市埋蔵文化財センター

（財）神戸市埋蔵文化財センター

12. 最後に、現地での調査及び本報告の作成にあたっては下記の方々にご協力いただきました。ここに記して感謝いたします。

神戸市都市計画部長 長田区南港開発事務所

渋谷・日本国技・大相撲競技場関係企業体

また、調査調査の今、皆様の様子について『長田ふれあい市』に公募されている方々より貴重なお話を伺うこと
ができました。当地の歴史を語る人々の記憶も文化的财産であることをここに記します。
本文目次

I. はじめに
1. 大橋町遺跡と周辺の遺跡 ................................................................. 1
   (1) 遺跡の位置と地理的環境 ......................................................... 1
   (2) 周辺の遺跡 .................................................................. 2
2. 調査の経緯 .................................................................. 5
3. 整理・報告書作成作業 ................................................................. 7

II. 検出遺構と出土遺物
1. 基本調査 .................................................................. 9
2. 1・2区の調査 .................................................................. 11
   (1) 検出遺構 .................................................................. 11
   (2) 小結 .................................................................... 12
3. 3区の調査 .................................................................. 13
   (1) 中世の遺構と出土遺物 ..................................................... 14
   (2) 古墳時代の遺構と出土遺物 ............................................... 23
   (3) 強固時代の遺構と出土遺物 ................................................ 25
   (4) 遺構に伴わない出土 .................................................................. 30
   (5) 小結 .................................................................... 30

III. 大橋町遺跡第2次調査で出土した木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ（株） ............................................................. 31

IV. まとめ
   (1) 大橋町遺跡第2次調査の成果 ............................................... 35
   (2) SED01にみられる地震痕跡と思われる事象について .............. 37
   (3) 強固時代の遺構一検出とその性格について ......................... 39
   (4) まとめ .................................................................... 41
   (5) あとがき .................................................................. 42

報告書抄録

挿図目次

<table>
<thead>
<tr>
<th>図</th>
<th>内 容</th>
<th>ページ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>大橋町遺跡位置図</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>周辺の主要な遺跡（1/30,000）</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>調査地域図（1/5,000）</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>調査地区剖面図</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>調査区全体図</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>1・2区土層断面図</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>3区土層断面図</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>1・2区平面図及びSED01平面図</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>SED02-03平面図</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>SED01平面図</td>
<td>13</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>SED01断面図</td>
<td>14</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>SED01及び周辺遺跡平面図</td>
<td>15</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>SED01出土の遺物</td>
<td>16</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>SED01出土の木製品</td>
<td>17</td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>SED01東側部検出土平面図</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>SK03平面図</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>SK03出土の遺物</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>SK04平面図及び出土状況</td>
<td>19</td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>SED04出入の遺物</td>
<td>19</td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>SK02平面図</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>SK02出土の遺物</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>22</td>
<td>SED01平面図</td>
<td>21</td>
</tr>
</tbody>
</table>
写真図版 1 1. 区SD01検出状況（北西から）
写真図版 2 2. 区SD01及びSK01検出状況（南から）
写真図版 3 2. 区全体（南東から）
写真図版 4 1.2 区SD02・03（南から）
写真図版 5 2. 区SD02・03（南から）
写真図版 6 2. 区SD02・03（南から）
写真図版 7 3. 区垂直写真（モザイク合成）
写真図版 8 1. 区北半徴状況（北東より）
（クレーン撮影）
写真図版 9 2. 区北半徴状況（北東より）
写真図版 10 3. 区南半徴状況（南から）（クレーン撮影）
写真図版 11 1. 区SD01徴状況（南東から）
2. 区SD01徴状況（南東から）
3. 区SD01徴状況（南東から）
4. 区SD01徴状況（南東から）
写真図版 12 1. 区SD01徴状況（北東から）
2. 区SD01徴状況（北東から）
写真図版 13 1. 区SD01徴状況（北東から）
2. 区SD01徴状況（北東から）
写真図版 14 1. 区SD01徴状況（北東から）
2. 区SD01徴状況（北東から）
写真図版 15 1. 区SD01徴状況（北東から）
2. 区SD01徴状況（北東から）
写真図版 16 1. 区SD01徴状況（北東から）
2. 区SD01徴状況（北東から）
写真図版 17 1. 区SD01徴状況（北東から）
写真図版 18 1. 区SD01徴状況（北東から）
写真図版 19 1. 区SD01徴状況（北東から）
写真図版 20 1. 区SD01徴状況（北東から）
写真図版 21 1. 区SD01徴状況（北東から）

表 目 次
第1表 周辺の遺跡……………………………………4
第2表 調査期間…観表………………………………7
第3表 研究会調査結果………………………………31

掲載写真目次
掲載写真 1 大相模遺跡第1～6次調査地と
石松枝 5月1目遺跡………………………………5
掲載写真 2 長尾ふれあい庭園……………………6
掲載写真 3 調査作業風景…………………………7
掲載写真 4 クレーン撮影作業風景……………………7
掲載写真 5 遺物整理作業風景……………………7
掲載写真 6 曲物 銅の鏡じるし…………………22
掲載写真 7 SD11遺物出土状況……………………24
掲載写真 8 SK05土層断面……………………28
掲載写真 9 出土木村組織機微細写真…………33
掲載写真10 SD01断面写真……………………33
掲載写真11 SE01断面写真……………………38
掲載写真12 3区近〜現代木戸の現状に
みられる土層の「ずれ」……………………39

写真図版目次
写真図版 調査地区概況（海上より）
写真図版 1 1. 調査地区概況（海上より）
2. 調査地区概況（海上より）
 平成10（1998）年撮影
【神戸市市財政局航空写真データより】
I. はじめに

1. 大橋町遺跡と周辺の遺跡

（1）遺跡の位置と地理的環境

大橋町遺跡は、東方に長く延びる神戸市の市街地の西端、現在のJR新長田駅の南約0.2kmに位置する。周辺は元々商店や住居、工場が混在する繁華な町であったが、平成7年の兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）により甚大な被害を受けた。震災後は再開発ビルを中心とする高層建築物が林立し、市街地西部の中心的な地域として新たな都市景観を創造しつつある。遺跡は平成15年に新長田駅前地区震災復興再開発事業に伴い発見され、今のところ明らかになっている遺跡の範囲はJR山陽本線（神戸線）と国道2号線に挟まれた東西100m、南北150mの範囲で、弥生時代～中世の集落跡と考えられている。遺跡の名称は、はじめに遺構・遺物が確認された大橋町5丁目の地名に因んでいる。

地形的には六甲山系の東端に特徴的な山容を映す高取山を北に望み、高取山を挟み南流する刈 vera川（現新渕川）と妙法寺川の両河川間に挟まれた現状面5〜6mの北西から南東への緩やかな下がり地形を示す沖積地上に立地している。刈 vera川は東約0.7km、妙法寺川は西約1.4kmに位置し、現在の海岸線までの距離は約0.8kmである。両河川の間に扇状地はあまり発達しておらず、西六甲山系南麓に形成される典型的な沖積地の地勢を示している。
（2）周辺の遺跡

大橋町遺跡周辺に立地する主要な遺跡を石見図（図2）に示す。

縄文時代

対満川中流域左岸に立地する長田史跡境内遺跡や五倉町遺跡、五倉町遺跡で後期～前期の遺物が出土し、住居跡の発見は他のものと比較して規模が見られる。五倉町遺跡では後期に属する舟形土器をはじめとする多量の遺物が出土している。

弥生時代

妙法寺川流域では扇状地前方部に立地する成田遺跡で前期の集落の一部が確認されており、旧河道内に設けられた水路防護施設とされる川防柵列遺跡や村川と並行した水路は保存されている。
中期には弥生住居や土器などの遺物が出土し、当地域における撦点集落に発展したと推測され、近年の調査では方形周溝形を構成する集落の発見があった。後期になると成田遺跡では遺構、遺物の検出が減少するが、周辺の大手町遺跡、大田町遺跡、若松町遺跡等長田史跡境内遺跡、長田史跡区南遺跡、御嶽遺跡で集落の形を示す集落の拡張の傾向が窺われる。

古墳時代

古墳時代では背後の大塚上に築造された古墳、奈良山松原古墳、夢野丸山古墳の前期古墳が築造され、彫刻時代後期から発表された遺跡の奥津城と考えられる。また下高川河口以西に存在したと考えられる念仏山古墳は先長約200mの大型の前方後円墳であったとされ、明治時代の発掘調査で抽出された遺物の形状から推測される。当地域が弥生・戦国期の国境に近い場所であることを考えればその存在は不確実ながら重要である。後期には下高川河口周辺に古墳群が形成され、さらに下高川の最奥部には塩田遺跡が確認されている。

集落では松野遺跡において多数の住居跡が発見されたほか、御香遺跡、神楽遺跡、大田町遺跡、関取町遺跡なども住居跡が発見されている。

津和頸期以降

奈良時代～平安時代には矢倉設置遺跡・明石線に沿って官衙的な様相を示す御堂遺跡や大田町遺跡、長田野田遺跡、東に位置する上沢遺跡や小泉寺遺跡とされる住居遺跡などの遺跡が発見され、神戸・明石線は古代山陽道の痕跡と見られる。また塩田遺跡、神戸・上溝町遺跡の周辺で平成関連の重要な遺跡が発見されている。

近接する遺跡

大橋町遺跡の南側に古墳時代中期～後期の集落である松野遺跡が存在する。第1次調査において豪族居館あるいは神廻と解釈される城郭と建物群を検出し、この建物群の南側では塩田遺跡の再発見作業に伴う発掘調査において住居住居を発見するなどの遺跡が確認されている。また多量の滑石製品の出土は集落内の祭祀を考えさせる。

また国府町町域をなす南側には富野町遺跡が存在する。古代末～中世の集落建物遺跡や井戸、水路遺構、耕作痕が多く確認されている。上流社の遺跡を含む遺跡を、特に井戸の検出や水路痕の出土から富野川の流域に近い半島半島の集落の姿を捉えるとされる。
図2 周辺の主な遺跡（1/30,000）
<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>道路名</th>
<th>時代</th>
<th>主な遺構・遺物</th>
</tr>
</thead>
</table>
| 1    | 大殿町通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 掛川宿等比べ
| 2    | 大手町通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 3    | 大田町通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 4    | 末広通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 5    | 水前寺通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 6    | 長崎町通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 7    | 末広通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 8    | 水前寺通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 9    | 長崎町通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 10   | 内宿通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 11   | 内宿通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 12   | 内宿通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 13   | 水前寺通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 14   | 松本町通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 15   | 玉敷ろ通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 16   | 倉田町通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 17   | 花見宿通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 18   | 志賀島通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 19   | 花見宿通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 20   | 花見宿通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ
| 21   | 花見宿通 | 昭和時代〜江戸時代 | (平成〜令和) 由利町宿等比べ

第1表 周辺の遺跡

主要参考文献

1. 大宮遊史
2. 大宮遊史
3. 大宮遊史
4. 大宮遊史
5. 大宮遊史
6. 大宮遊史
7. 大宮遊史
8. 大宮遊史
9. 大宮遊史
10. 大宮遊史
11. 大宮遊史
12. 大宮遊史
13. 大宮遊史
14. 大宮遊史
15. 大宮遊史
16. 大宮遊史
17. 大宮遊史
18. 大宮遊史
19. 大宮遊史
20. 大宮遊史
21. 大宮遊史
2. 調査の経緯

遺跡の発見

大橋町遺跡の周辺は早くから市街地が進み、住宅や店舗、工場が立ち並ぶ活気あふれる町であった。平成7年1月17日未明に兵庫県南部地震が発生、大橋町遺跡の立地する長田区－須磨区にかけて、建物倒塌や大規模な火災により甚大な被害を被り、往時の面影はほとんど失われてしまった。震災後、JR新長田駅周辺において復興区画整理事業や震災前から進められていた再開発事業が立ち上がり、それと並行して事業地内の埋蔵文化財の発掘調査の実施はもとより、その周辺においても遺跡の拡がりや埋蔵文化財の存在を確認する目的で試掘調査が実施された。現在、大橋町遺跡とする街区では広く試掘調査の実施が困難な状況にあったが、再開発ビルの建設開始に伴い、従来建物の移転、除却の作業遂行状況に合わせて当該地での埋蔵文化財の有無を確認する作業が行われた。

平成15年の大橋町5丁目街区での試掘調査の結果、遺構・遺物が確認され、新たな遺跡として当教育委員会では「大橋町遺跡」と命名、周知化を図り、大橋町5丁目街区のうち、再開発ビルの建築範囲について発掘調査（第1次調査）を実施した。

第1次調査は現況建物の撤去や移設を含めた工事と同時に進められたため、都合6回に分割して調査を実施した（第1～6次調査）。調査では平安時代～鎌倉時代の礎立柱建物や墓、溝、井戸や水溜め状遺構の他、多くの耕作痕（縄溝）など古代末～中世の遺構

図3 調査地位置図（1/5,000）
を中心に、古墳時代の溝、弥生時代の柱穴や溝を検出した。復元された掘立柱建物は9棟で、うち1棟の建物のそばから屋敷跡と考えられる木棺墓1基を検出した。出土遺物などから建物は12世紀末〜13世紀前半に構築されたと考えられ、以降に新たに築かれた建物の存在は明確でなく、一時期に形成された居住域であったと推測されている。

調査の経過

今回の調査は、第1次調査地の北側に位置する若松町5丁目の街区を二分する東西道路より南半の地区を対象としたもので、調査原因は先の調査と同じく再開発ビル建設に伴うものである。当街区には震災後に仮設市場ができ、生活に供するとともに、市場の中央の広場には大橋町5丁目から湧出する温泉を用いた「長田ふれあい足湯」が設けられ、地域住民の憩いの場となっていた。今回の事業の実施に際して「足湯」は先の第1次調査地の南側の仮設建物内に移されたが、地域住民はもとより、長田区を離れた人々、遠来からの客も集う場所として賑わっている。

図写真2 長田ふれあい足湯（平成19年5月撮影）

今回の調査地である若松町5丁目の街区においても第1次調査の結果から遺跡の拡張が予想され、掘削可能な箇所より順次試掘調査を進めた。その結果、従来建物の基礎などにより既に文化財として扱われている箇所は多かったものの、それらの影響の少なかった部分では遺構・遺物が検出され、都合5回にわたる試掘調査の結果から発掘調査が必要となる箇所（範囲）及び面積を算定し、事業地内の約1,600㎡の範囲について全面調査を実施することとなった。

図4 調査地区割図
調査は既存建物の解体・撤去作業と並行して行い、まず撤去可能であった1区での調査を実施した後、残土置き場の関係から3区の調査を南北に分けて反転掘削作業にて行い、同時に地中障害物の撤去の合間を縫って、1区に隣接する2区の調査を実施した。

調査の方法
調査地内には建物基礎の解体後に均された整地土、盛土が厚く堆積し、現地表下0.6～0.8mに中世の耕土層と考えられる灰色砂質土が堆積する。調査ではこの中世の耕土層直上までを重機により除去し、後は人力による掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

遺構については地上写真撮影により現状を記録するとともに、空中写真撮影を実施し、合わせて調査区の全体図の作成を空中写真測量により1/20の精度で行い、調査の完了後に図面・校正作業を進める。今回は調査区の平面図とともに1次調査地を含めた全体図を作成した。遺物の出土した遺構や調査区の土層断面図については現地で1/20、1/10の精度で図化を行い、記録作業を実施した。

3. 整理・報告書作成作業
調査終了後より今年度（平成19年度）にかけて出土品の洗浄作業及びネーミング作業を実施し、遺構からの出土土器を中心に対合、石膏補修や色材復元を行い、木製品については樹脂固定を外部に委託するとともに、遺物の写真撮影を埋蔵文化財センターにおいて行った。これら遺構・遺物の検出状況を整理しながら順次、報告書の作成作業を進めていった。

<table>
<thead>
<tr>
<th>調査区</th>
<th>面積</th>
<th>調査期間</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第1区</td>
<td>約140㎡</td>
<td>平成18年4月17日～4月25日</td>
</tr>
<tr>
<td>第2区</td>
<td>約140㎡</td>
<td>平成18年5月23日～5月30日</td>
</tr>
<tr>
<td>第3区</td>
<td>約1260㎡</td>
<td>平成18年5月9日～6月24日</td>
</tr>
</tbody>
</table>

第2表 調査期間一覧表
II. 検出遺構と出土遺物

1. 基本層

調査区内は従前の遺構の基礎などの複雑を受けているが、表土、整地土の下に部分的に現

耕土が残り、さらに近世の田耕土が複数断面である。この下に灰色砂質土の中世の耕土が

堆積する。耕土層以下、暗褐色シルト、暗灰色シルトの順に堆積する。調査区壁面での

観察や一部の遺構は暗褐色シルト上部で見られることがある。この層が本来は遺構検

出面一生活面となるが、遺構埋没土も同様の色調のものが多く、遺構の輪郭を明確に押さえ

ることが困難であることから、0.05～0.1m下の黄（灰）色シルト面で遺構の検出作業を実施し

た。暗褐色シルト及び暗灰色シルトの堆積は下位の基盤層である灰色シルトが徐々に上

填化した部分と考えられ、調査区壁で埋没状況が確認できる遺構には、暗褐色シルト上

屋面への遺構の上部の立ち上がりが認められるものと認められない遺構があり、疎落化に伴

い埋没した遺構もあり、平面的な検出作業を困難にしている要因ではないかと考えられる。

1・2区

調査区内的南東側に中世の田耕土が残るもので、それ以外の部分では従前遺構を建築す

る際に削平を受け、遺構の大半は遺構基礎や整地土直下で検出した。遺構面の高さは北西

側でT.P.5.3m、南東側でT.P.5.2mとほぼ水平ながら、調査区の南東側でやや砂質の強

い土壌になるなど、ごくわずかな層相の違いと下がり地形が認められる。

3区

調査地の西側半分を占める3区でも中央の「長田ふれあい足湯」の地底構造をはじめ

店舗の基礎などにより遺構面が失われている部分が多く、本来の地形については不明瞭な

部分が多い。北西部（T.P.5.6m前後）から西側にかけて地形的に高く、そこから南東方

向への下がり地形を形成する。南東部での遺構面はT.P.5.4m前後である。覆蔵の影響を

受けていない部分では、西側を除くより全域に中世の耕土、暗褐色シルトが遺存する。

図6 1・2区土層断面図
図7 3区土層断面図
2. 1・2区の調査

街区の南東に位置する調査区で、調査面積は1区、2区合わせて約280㎡である。遺構面は1面で溝3条、土坑2基、ピットを検出した。

(1) 検出遺構
①溝

SD01 幅0.6〜0.7m、深さ約0.2mの東西方向の溝で、検出長は約19mである。断面の形状は西側では曲状を呈し、東側では底部が平らに近く垂直形に近い形状である。壁土は暗灰色〜黒灰色の粘質土〜シルトである。遺物は小片の弥生土器が1点出土したのみである。

図8 1・2区平面図及びSD01平・断面図
SD02 幅0.6〜0.7m、深さ約0.15mの南北方向の溝である。試掘トレンチを設けた部分でSD03と接する。基礎は黒褐色シルトの単一層で、弥生土器と考えられる極小片の遺物が出土したに留まる。

SD03 調査区の東壁でわずかに検出できた幅約0.3m、深さ約0.25mの溝である。基礎は暗灰色シルトで遺物は出土していない。西にやや弧を描く南北方向の溝SD02に、東西方向の溝SD03が接するものと思われる。切り合い関係や時期差は不明である。

②土坑
SK01 検出長約1.8m、幅0.7m、深さ約0.25mで、平面の形状は長楕円形を呈するが、調査区外に延び、溝になる可能性もある。遺物は出土していないが、基礎は上層の中世の縄土と同様の灰色砂質土であることから中世の遺構と考えられる。SD01を切り込む。

SK02 東西約1.2m、南北約1.0m、平面捷円形を呈する土坑である。基礎は灰色砂質シルトで、深さは0.1mと浅い。SK01同様、中世の遺構と考えられる。

③ビット SK02の周辺で多くの杭跡を確認した。径0.05〜0.1m、深さ約0.1mのものがほとんどであるが、調査区右壁際にそれらよりにわずかに大きい杭跡が並ぶ。直径（方形のものは一边）約0.15m、深さ約0.15mで黒褐色シルト、あるいは粘土に近い基礎である。

図9 SD02・03平・断面図

(2) 小 結

1区、2区では、後世の掘削によりわずかに中世の土坑と溝を残す痕跡、弥生時代の土器のみが出土した長く延びる溝と時期不明の杭跡が確認できたのみであった。

遺構面上に堆積する旧耕土層は、南東部分では前後建物による影響が少なく、層の残りは良かったものの、遺物の出土量は少なかった。
3. 3区の調査

街区の西半分にあたる調査区である。調査区の中央にあった「新長田ふれあい足湯」の部分についてはすでに地下の機械室設置に伴い、大規模に撤去されていることが判明していたため、この部分を島状に残して南北に調査区を分割して反転作業にて調査を実施した。調査面積約1,280㎡で、弥生時代〜中世の遺構を同一面で検出した。
（1）中世の遺構と出土遺物

中世の遺構と考えられるのは調査区の西側で検出した落込み1基、土塚4基と井戸1基、落込み周辺で検出した柱穴である。

①落込み

SX01

3区の西端に位置する。北西、東北、南東の3箇所で屋根頂部が検出され、辺長9m前後の四角形のプランが想定されるが、南西側の大半が調査区外に延びるため、全体の規模や明確な形状は不明である。検出した範囲や断面を巡を行った状況から遺構を復元すると、元々洪水の影響を受けやすい場所で、流路状に梭らして落ち込みを形成していた所跡々に水や砂が流れ込んだものと考えられる。南側の壁面では幅3〜4m、深さ約0.8〜1.2mでY字形に堆積するシルトが2層とその間に砂の堆積があり、落ち込みが形成されて以降、少なくとも4〜5度の大きな流れ込みがあったと思われる。中層に厚く堆積したシルトの状況から、平素は緩やかに水が流れ込む状態であり、その際水を吸う場所と利用していたと考えられる。第1次検査検出の水溜め状遺構のような盛土で滅かされたスロープなどはなく、東の隅部に凹みを設ける、あるいは各隅部にのみ人負の大石が点在する状況は土塚が行いややすいように整形し、足場になるよう手が加えられた痕跡かと推測される。

図11 SX01土層断面図

ほとんどの遺物は中央に薄く堆積したシルトや、東の隅部の下に堆積込まれた長径約2mの浅い落込み内に堆積するシルトから出土しており、土器類、須恵器、瓦器、青磁片が含まれる。また下層の洪水層の上面からはかなり厚めの突部土器や奈良時代の土偶器高柄片、須恵器壺の頸部が出土しており、これは付近からの流入と考えられる。最終埋土の砂層から塚町時代のものと考えられる陶器片が1点出土しており、中世末頃に埋没したものと考えられる。埋没後も上部に堆積した緑土層は水平堆積でなくレンズ状の堆積となっていることから、調査地の中では周辺よりも地質的には高いものの、依然として軟弱な地盤であって、一帯は永らく安定した場所にはならなかったと推測される。
図13  SX01出土の遺物
出土遺物

また、SX01の北側では等間隔に並ぶ径0.15〜0.3mの3基のビットやSX01の周辺部や土坑と重複する形で計9基のビットを検出した。土坑とビットの切り合い関係は明らかにできなかった。建造としての拡張は認められないと、横や縦列になる可能性がある。

図示可能なものについては極力実測を行ったが、口径や器高の復元値については正確さにかかわる部分がある。

出土遺物では、総ての瓦器の出土量が多い傾向が見られる。1〜12は瓦管柵である。
1〜6は器壁が薄く、比較的直線的に束縛から口縁部に延びる器形のものである。1は口総径14.2cm、器高3.9cmで、束縛中に小破れの断面三角形の高台を貼り付ける。2は口径13.4cm、残高3.7cm、3は口径13.2cm、残高3.6cm、4は口径15.2cm、残高3.8cm、甚長である。5は口径13.0cm、残高4.0cmで、SK03の埋土直上から出土している。6は口径12.8cm、残高3.3cmである。7〜12は器壁がやや厚手である。7は口径13.4cm、残高3.8cm。8は口径15.6cm、残高4.0cm。9は口径12.8cm、残高3.5cm、高台がある。10は口径13.8cm、残高2.8cm。11は口径12.4cm、残高2.9cm。12は唯一完形に復元できたもので口径12.4cm、器高3.3cmである。なで調整により指示さえの痕跡は消されるが、束縛が明瞭に残る。内部のミガキは線模様で、全体に難い感じを受ける。
13〜16は土器柵である。13は口径7.6cm、器高1.3cmで束縛から端までである。14は口径8.0cm、器高1.0cm、体部一口縁にかけて束縛は厚い。口縁端に狭い形状が形成される。15は口径8.8cm、器高1.3cm、体部下部に指示さえの痕跡が残り、束縛が形成される。16は口径11.2cm、残高2.4cmの帯で、体部内外に指示さえの痕跡が残る。斜め上方に直線的に延びる口縁部端部は帯状に化上げられる。
17〜18は須恵器である。17は口径15.0cm、18は口径15.2cm、均一の厚みで直線的に延びる口縁であると同時に、18は土器柵部の器壁は薄く端部は丸く収められる。
19は茶磁涷の破片である。束縛に束縛1条、束縛口縁端部に束縛2条が残り、束縛には束縛の模様の一部が見受けられるが、束縛形態の確認が困難である。束縛高8.1cm、広く開いた口縁部と束縛の張りの強い体部を持つものと思われる。束縛には粘土接合痕が明瞭に残る。21は土器柵の一部の束縛が発見されているが、断面三角形、束縛が非常に薄い。
22は丸五片である。四面の束縛は束縛の束縛面の一部がわずかに残っており、束縛すると幅12cmほどになる。束縛に直線形、束縛に束縛痕が残る。23は束縛土器の割片である。口縁部端部に割片が、束縛下直下のD形の貼り付け凹凸がほとんど残ていない。束縛面ともにミガキの痕跡が認められる。
また堆積の一部に植木遺体層があり、下層の砂層との関係で木製品が出土している。24は葉物の底広と考えられる破片である。最大幅28cm、厚さ0.6cmで、厚さ30cmほどに復元できる。25は木製品で径10cm、幅を2cmに、部分を切り開く。用途は不明である。
出雲時代の遺物については詳細な調査でも断ち割り調査時に下層の洪水層などから出土している。

図14 SX01出土の木製品
土坑
SX01の北東肩部で土坑を3基検出した。SX01の最終埋土の砂層を除去した段階で遺構の輪郭が見え始めることからSX01の最終埋没以前の遺構と考えられるが、一部には埋没過程において形成されたものも存在する。図15 SX01東肩部検出土坑平面図

3基検出した土坑のうち南端に位置する。遺構の輪郭は平面四角であったと考えられるが、北側が崩れ、歪な形となる。上部は長辺約1.2m、短辺約1mで、断面の形状で見るとき、密やかに落ち込んだ後、下部は壁が直立に近く立ち上がる箱形となる。検出面からの深さは最大で約0.9mである。下層に砂とシルト層が幾つかに堆積した様子が窺え、中層より上に基盤層と同様の土をブロック状に含む砂質上で埋め戻された状況がみられる。土坑の中位から土器1個が1点出土した。

図16 SK03平・断面図

26は口径10.4cm、器高1.5cmである。全体に丁寧に整えられ、器壁は滑らか、外面には強い曲げで、裏側は1段形成される。図17 SK03出土の遺物

- 18 -
SK04 3基の土坑の中央で、SX01の北東角部に位置する。築構の最終埋土は径0.7〜0.8m、深さ約0.15mの浅い落ち込み状に堆積した砂層で、この上面から30cmの大玉3点と挙大の礫2点が出土した。SX01の埋没過程において意図的に礫を置いたものと想像される。

上層 砕の検出状況

1. 棕色細砂
2. 灰色シルト質細砂
3. 灰褐色シルト質細砂
4. 明灰色細砂
5. 灰色粘質シルト
6. 灰色砂質シルト
7. 深黄褐色シルト（小礫層間に挟む）
8. 褐灰褐色砂質シルト（灰色シルトブロック）土器皿
9. 灰色砂質シルト

図18 SK04平・断面図及び遺物出土状況

砂層を取り除いた下部は、一辺約1.5mの平面形が正の隅角形の土坑となり、断面の形状は漏斗状で、最深部までは深さ約0.4mである。土坑中央の底部に近い深さから土師器皿が出土した。取り上げの段階で破けた皿の破片を丁寧に見た結果、皿は2点で、当初は皿の口縁部を重ね合わせていたと思われ、その他にも埋土中から土師器、須恵器、瓦器、黑色土器が出土しており、築構の時期は鎌倉時代前半頃と考えられる。

27は口径8.6cm、器高1.2cmである。重ね
あった上の皿にあたる。28は口径8.6cm、器高1.2cmである。下の皿にあたる。いずれも体部内・外面ともに横なでが施されるが、器壁は厚く、ほってりとした印象を与える。

29は口径13.2cm、残存高3.0cmの須恵器を残で、わずかに内衛しながら立ち上がった後、外反する口縁部の内側には段が形成される。30は口径15.2cm、残存高3.8cmの須恵器残で、体部上半は直線的に外側に延び、口縁縮部内側には段を有する。内面下半にのみ不定方向のなでが施され、その他の部分は横なで仕上げである。

3基並んだ土坑の北端に位置する。径約4.5mの平面形が円形の落ち込みとして掘削を行ったが、遺構埋土である灰色砂質土は深さ約0.1mと非常に浅かった。この落ち込みの南側底面でさらに土坑を検出した。土坑の規模は長辺約1.5m、短辺約0.9m、平面形は亜長の隅丸長方形を呈し、深さは約0.35mである。上坑の埋土は大半が砂で、底部と落ち込みの底面にシルトが薄く堆積する。土坑からは平安時代〜中世のものと考えられる土師器、須恵器片がわずかに出土したのみで、ほとんどの遺物は土坑の深い落ち込み部分から出土している。一連の遺構と判断したが、埋在の状況から最上層の灰色砂質土は中世の耕土層が深い堆みに溜まったもので、南側の土坑となった部分は別遺構の可能性が高い。

図20 SX02平面断面図

31は断面連合形の高台が付く須恵器壷で、高台径10.6cm、残存高2.2cmである。平安時代の遺物と考えられるが、最上層の灰色層から出土しており、遺構の年代を示すかは明らかでない。

図21 SX02出土の遺物
①井戸

直径約1.7m、平面形はやや円形を呈する井戸である。検出面から約0.7mの深さで灰色砂を検出し、砂面で熱を受けた礫が10個ほどと須恵器鉢の体部片が1点出土した。鉢32は底径11.5cm、残存長8.0cmで、底部は系切り未調整、粘土絹の積み上げ痕が明瞭に残る。

1. 褐色砂質土
2. 暗褐色シルト（黄色ブロック混）
3. 灰褐色砂質シルト（灰色帯・灰色砂混合層多し）
4. 暗灰色微細砂
5. 暗灰色シルト
6. 淡灰色砂質土（黄色砂混、ラミナ状）
7. 暗灰色褐色シルト
8. 暗灰色シルト
9. 明灰色細砂
10. 淡褐色シルト（植物遊休層）
11. 明灰色微細砂
12. 樹灰褐色シルト（樹脂細砂一部混）
13. 灰色微細砂
14. 灰褐色シルト（小礫混）
15. 黃灰色細砂
16. 暗灰色シルト
17. 増灰色シルト
18. 灰色シルト（樹脂細砂）
19. 明灰色シルト
20. 明灰色微細砂
21. 灰色細砂
22. 淡灰色シルト（樹脂細砂）
23. 灰色シルト（樹脂細砂）
24. 暗灰色シルト
25. 淡灰色細砂

A. 暗灰色褐色シルト
B. 明灰色シルト
C. 黒灰色細砂シルト
D. 灰色細砂
E. 褐色細砂
F. （黄）白色シルト質粒細砂

図22 SE01平断面図
縁と須恵器輪が発見され、底面と考えていた灰色砂は硬く縮まる砂であったが、さらに0.2mほど幅広い状態に落ち込み、この下から深さ約0.4m、径約0.6mの円形の掘形を検出し、中央底で井戸となる曲物を確認した。曲物を掘えた黄色粗砂が湧水層である。曲物は側板と上下の筒が良好に保存しており、曲物内から須恵器項の破片24点と、曲物を掘えた掘形の上面から須恵器項の破片1点、曲物の一部と考えられる木片が出土した。曲物内出土の須恵器項のうち1点は掘形上のものと接合したことから、いずれも井戸が使用されていたら、時に投棄されたものと考えられる。曲物は下段の筒が側板からはずれていたが、ほぼ井戸構築に際して掘えられた当初の姿で検出されたと言える。

図23 SE01出土の遺物

33は底径5.8cm、残高3.7cmの須恵器項である。底部は回転糸切りで、底部内面には粘土線の痕跡が残る。底部には厚みがあり、全体に厚みをもった絹を用いる。34は復元径15.4cm、厚さ5.5cmの須恵器項で、回転糸切り未整で、粘土を底部側面に付けての痕跡が残る。直線的に延びる口縁部は厚みをもつ、端部を丸く収める。

曲物35は径36.0cm、高さ22.0cm、厚さ0.6cmで、上下に幅5.0cmの縁が付く。側板、蓋とともにヒノキ材である。側板の縁が合わせて1箇所6段鎮じである。繋が鎮じは1箇所の2段鎮じである。36は曲物の鎮と考えられる木片で、内側にやや相い嵌めが施される。

井戸は洪水により曲物上部までが埋没した後、人為的に埋め戻されたものと推測される。井戸の焼絵は出土した須恵器より13世紀前半と考えられる。

挿図写真6 曲物 筒の縁じ部

図24 SE01出土の木製品
(2) 古墳時代の遺構と出土遺物

古墳時代の遺構は2条である。北側のSD09・10と南側のSD11は同一の溝である。

SD11の調査区の東寄りの部分で、北西から南東方向の溝を1条確認した。接続により大半を失うが、調査区内での検出長は約33mである。幅約1.8m、深さ約0.8mで、断面の形状

図25 SD11平・断面図
は緩やかなV字形、また部分的に逆台形を呈する。築の中位に堆積した砂層から完成の須恵器の杯蓋1点と、最上層に堆積した黒色シルトから須恵器の杯蓋片が出土したものに遺物の出土はなかった。

37号は口径13.3cm、器高3.5cmの須恵器杯蓋である。天井部のヘラ削りは全体の2分の1に及び、非常に丁寧に施される。TK43型式並行期、5世紀後半に属する。口縁部に一箇所、幅約2.5cm、高さ約1.0cmの大きさで打ち欠いた部分がある。

38号は口径16.8cm、器高4.0cmの須恵器杯蓋で、遺構の最終埋土である黒色シルトから出土したもの。ヘラ削りは天井部の3分の1の位置までで、全体にやや丸みを帯び、調整は甘い。TK217型式並行期、6世紀後半のものである。

築の埋土は下層に砂の堆積が続き、最上層に黑色シルトが堆積する。中位の砂層の中に炭層の薄い堆積があり、掘り直しなどの状況も想定される。古墳時代の中頃に掘削され、洪水や自然堆積などにより埋没しながらも、最終的に緩やかに土が堆積する古墳時代後期の段階まで機能していたと考えられるが、遺構内からは図示した2点の土器が出土したもので、ほぼ遺物を含まない状況と言える。37号の須恵器杯蓋にみられる打ち欠きの行為は通例、祭祀など、何らかの意図をもって行に行われたと理解される場合が多いが、今回の調査では築の埋土や周囲においてその他の特異な状況は確認されていない。
(3) 弁生時代の遺構と出土遺物

図28 3区北半検出溝群 平・断面図
調査地全域に拡がる幅0.5m前後の細長い延びる溝を探出している。3区では14の溝を検出した。出土遺物はほはない状況であるが、わずかに青铜器と考えられる破片が出土したこと、またそれ以外の時期の遺物が全く混入していないこと、古墳時代後期の溝に切られる溝の存在から、同様の溝は古墳時代の遺構と判断した。
また各区で検出したSD03のようにごく一部が確認される状況や、3区では南北に反転して調査を実施したことから、同じ溝に2つの番号を与えたこともある。
SD04 調査区の東中央部で検出した東北から南東方向への直線的な溝である。幅約0.4m、深さ約0.1mである。帯土は黑色シルト層の单層である。遺物は出土していない。
SD05 調査区の東で検出した溝で、北西から南東へ延び、その後市に屈曲する。帯土はSD06に続く。断面の形状は浅い圓状である。幅約0.6m、深さは0.1～0.2mである。
SD06 調査区の東北端で検出した溝でSD05から続く東西方向の溝である。溝の北端でSD07と接する。帯土が近似しており、切り合い関係にあるというよろ歴史過程に差が生じたものと考えられる。深さ約0.7mで、断面の形状は上方がU字形、下方は箱形で平底となる。
SD07 SD06と接する南北方向の溝である。北端での断面の形状は、下部は箱形に垂直に掘り込まれ、上部は細く幅広になる。溝幅約0.9m、底部幅約0.25m、深さ約0.3mである。南部での断面の形状はU字形となり、幅は約0.3mである。
SD08 調査区の中央部に北西から南東に向けて掘られた溝である。南端で急に折れ、南半で検出した溝群と合流する。南半の溝が埋没した後も開口していたが、新たに掘削された部分かは明らかでない。北西側で箱形に掘削された部分があるが、基本的な断面の形状は半円形である。幅約0.5m、深さは約0.2mである。
SD12 調査区の南東端で検出した溝で、SD13を突き直した可能性があり、上部の幅は0.8mとやや幅広である。深さは約0.2mである。
SD13 SD12とはほぼ同じ位置に掘削されていた溝である。検出面からの深さは約0.3mで、底の形状は平らである。形状からSD18に続く同様の溝と考えられる。
SD14 SD13に並行する溝である。調査区稜面ではSD13に切られた横板が分かれ、そこでは幅約0.5m、深さは約0.2mであったが、平面的には幅0.15mの幅が確認できた。
SD15 調査区の南中央で検出した北西から南東方向の溝で、現在の地割りに沿う。帯土の上方から堀が1点出た。
SD16 調査区南端ではわずかに検出した溝で、さらに南側に延びるものと考えられる。方向的にはSD05から続く溝と考えられる。古墳時代後期に掘削されたSD11に切られることから、古墳時代後期以前の年代が考えられる。同一の溝と考えられるSD05・06・07・16の縁延長は弧を描きながら約5m続くことになる。
SD17 SD18を突き直した可能性を含む溝である。断面の形状からはSD12から続く溝と判断される。SD18と重複しない部分があり、そこでの幅は約0.2m、深さ約0.2mである。
SD18 出土した欝の口縁片は古墳時代中期に属するものと考えられる。
SD19 SD17より切り込まれる。溝の形状はSD13に似ており、断面の形状は逆合形、あるいは傾斜状になる。幅約0.6m、深さ約0.3mで、扇状な石が2点出土した。
図29 3区南半検出溝群 平・断面図
溝からの出土遺物は数条の溝から各1点ずつ微細な遺物が出土したに留まる。図化できたのはSD17・18から出土した遺物のみである。

SD17から出土した39は菱の口縁片で、復元径19.0cm、残存高4.0cmである。くの字形に強く屈曲する口縁部をもち、縁端部は上下に焼き出。内外面ともわずかにハケによる調整痕が確認できる。SD18から出土した40は3cm角の口縁端部の破片で、貼り付け焼き帯が確認できる。弥生時代前期後半のものと考えられる。遺物が少ないため溝の時期の特定は困難であるが、40自体は焼耗が顕著であり、溝の時期を直接示すものではなく付近からの流入と思われる。

図30 SD17遺物出土状況平面図   図31 SD17・18出土の遺物

②土坑

SK05  調査区の南部で検出した直径約1.2mの円形の土坑である。深さは約0.5mで、理土の上層から弥生土器と考えられる破片が1点出土している。SD18埋沒後に掘削され、基盤層である黄色シルトをブロック状に含む粘質土で人為的に埋め戻されている。

図32 SK05平・断面図
SX01周辺で検出した中世の柱穴以外に約30基の柱穴を検出した。埋土は黒色シルトの少ない層や砂混じりの灰褐色上で、遺物を含まず、出土しても破片片のものであり、遺構の時期を特定するには至らない。明確に建物を構成する柱穴は認められないが、調査区の北端と調査区中央東寄りに約1.2m間隔で列を成す配置があり、横列などになる可能性を含む。また調査区の中央で検出したSP09〜12は直径0.3〜0.5m、深さ約0.2mの平面が円形の柱穴で、L字形に並んでおり、小規模な建物の存在が想定される。いずれも黒色シルトの中に灰色シルトをブロック状に含む共通する埋土である。SP09、12から弥生土器片が出土した他、調査区北西で散見される同規模の柱穴SP05からは弥生土器片とサヌカイト片の出土があった。41はSP05からの出土遺物で、水平列縁をもつ弥生土器高柄の口縁部の破片と考えられる。
(4) 遺構に伴わない遺物

今回の調査で出土した遺物の大半は、遺構検出面及び土壌化層の土に堆積する灰色粘質土の旧耕土層から出土したが、概して出土量は少ない。中世の土器器、須恵器を中心に奈良～平安時代の須恵器や中世の青磁碗、鉄砲や土鉄などの漁撈具、釘や銅錢（元豊通宝）が出土しており、弥生時代～古墳時代の遺物はほとんどない。検出遺構からは瓦器の出土が目立ったが、包含層からの出土はほとんど認められない。

図36 遺構に伴わない遺物

(5) 小　結

3区では第1次調査地で検出された遺構のうち、溝の続きは確認できたが、平安～鎌倉時代の明確な建物は検出されなかった。柱穴は30箇ほど確認できたが、一部を除き規模も小さく、遺物の出土も少なかった。後世の耕作や市街地化に伴い旧地表面が削り取られたと考えてもその数は少ないものといえる。井戸や流路を利用した水溜め（水汲み）状遺構などの水に関わる遺構の検出が当該地における特徴であろう。
Ⅲ. 大橋町遺跡第2次調査で出土した木製品の樹種

はじめに

今回の分析調査は、大橋町遺跡第2次調査時に13世紀前半頃に廃絶した井戸および鎌倉時代前半の水溜め状遺構から出土した曲物部材や加工木の樹種を明らかにすることを目的として樹種同定を実施する。

1. 試 料

試料は、13世紀前半に廃絶した井戸であるSE01から出土した曲物部材4点（遺物番号35・36）、鎌倉時代前半の水溜め状遺構であるSX01から出土した曲物底板1点（同24）、及び加工丸材1点（同25）の合計6点である。各資料の詳細は結果を合わせて表示する。

2. 分析方法

剥刀の刃を用いて木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（縦断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラー（浸水ガム、アラビアゴム、グリセリン）溶液で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、広葉樹材については、独立行政法人集成総合研究所の日本産木材識別データベースも利用する。


3. 結 果

樹種同定結果を表3に示す。木製品は、針葉樹2種類（ヒノキ・ヒノキ科）と広葉樹1種類（コラ属アガシ亜属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ（Chamaecyparis obtusa （Sieb. et Zucc.） Endlicher）ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型とトウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

横方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～10細胞高。

上記のヒノキを含むヒノキ科のいずれかであり、仮道管の配列等がヒノキに類似していることを考慮す

<table>
<thead>
<tr>
<th>遺物番号 (台帳番号)</th>
<th>造物名</th>
<th>出土地区</th>
<th>造物名</th>
<th>遺構名</th>
<th>位置</th>
<th>時期</th>
<th>樹種 (分類群)</th>
<th>和名</th>
<th>学名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>35 (R-038-1)</td>
<td>曲物側板</td>
<td>3区</td>
<td>SE01</td>
<td>13世紀前半</td>
<td>ヒノキ科</td>
<td>Cupressaceae</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>35 (R-038-2)</td>
<td>曲物側板 (上下)</td>
<td>3区</td>
<td>SF01</td>
<td>13世紀前半</td>
<td>ヒノキ</td>
<td>Chamaecyparis obtusa</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>35 (R-038-3)</td>
<td>曲物側板 (下)</td>
<td>3区</td>
<td>SE01</td>
<td>13世紀前半</td>
<td>ヒノキ</td>
<td>Chamaecyparis obtusa</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>36 (R-039)</td>
<td>曲物側板</td>
<td>3区</td>
<td>SE01</td>
<td>掘形内</td>
<td>13世紀前半</td>
<td>ヒノキ科</td>
<td>Cupressaceae</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>24 (R-040)</td>
<td>曲物底板</td>
<td>3区</td>
<td>SX01</td>
<td>鎌倉時代前半</td>
<td>ヒノキ</td>
<td>Chamaecyparis obtusa</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>25 (R-041)</td>
<td>加工丸材</td>
<td>3区</td>
<td>SX01</td>
<td>鎌倉時代前半</td>
<td>コラ属</td>
<td>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

-31-
13世紀前半に廃絶したSE01井戸から出土した木製品は、井戸前の樹木でのような黄色組織が拝まれた曲物の側板がヒノキ材、側板の上・下に拝まれた板がヒノキ材、曲物近くの縦断面から出土した曲物側板片がヒノキ材に同定された。一方、鎌倉時代前半に拝され中世末に完全に廃絶したとされる水溜め状態構成S01から出土した曲物基板はヒノキ、加工材がアガシ亜属に同定された。

SE01井戸及び水溜状態構成S01から出土した曲物は、いずれもヒノキないしヒノキ材が利用されていることが確認された。ヒノキの木材は、木材が適当で耐久性が高く、加工が容易で耐水性・防虫性に優れている。また、軸方向組織のほとんどが板状で占められ、材木部・骨材部の材質差が少ないため、薄い板を剥ぎ取るのが容易で強度も高い材質を有している。このようなヒノキの材質が、曲物にヒノキを利用した背景にあると考えられる。

播磨・播津地域の考古遺跡から出土した中世の曲物は、ヒノキの使用例が多く、木製品においてスギ材が多く用いられた沿馬地域においても曲物にはヒノキ材が多く用いられている（中村、2001・松谷、2001a・2001b・パリノ・サラヴェイ、2001）。今回のSE01井戸と同様に井戸底の集水施設として利用されている曲物の構造については、播磨市内に所在する二楽町遺跡における13世紀中頃の井戸跡の調査例がある（松谷、2001a）。その結果によれば、曲物の下部にツガ属が1点確認されているが、その他の側板や板などの部材にはヒノキあるいはヒノキ属が利用されている。このように曲物にはヒノキを中心とする樹葉樹材の選択が行われていたことが考えられる。今回の結果も、多くの時期差があるものの同様の傾向を示す事例といえる。

また、水溜め状態構成S01からは二楽町のアガシ亜属を利用した加工材も確認されている。中世におけるアガシ亜属の木材の利用例は、二楽町遺跡の13世紀初半にさかのぼる12世紀末～中の井戸（松谷、2001a）、玉津田中遺跡の藤倉時代の井戸（柳井、1986）、上総遺跡の鎌倉時代の遺跡および渡（パリノ・サラヴェイ、2002）で確認されている。中世末において、アガシ亜属に比べて、ヒノキなどの針葉樹材の使用例が見られ、材質の多様性と利用の多様性が考えられる。木材利用の本体は針葉樹材に移行していたことが指摘されている（松谷、2001a）。アガシ亜属の木材は、重硬で強度の高い材質を有することから、機能および美を兼ね備える製品において適材といえる。今回の調査の結果については不明な点多が材質を考慮した木材利用が行われていた可能性がある。

以上、大橋町遺跡第2次調査時に出土した曲物などの木製品の材質について述べてきたが、木材利用のあり方を考慮する上で調査区周辺の古植生との関係について検討することも大切であると考える。六甲山南麓地域の古植生については、仮に（2003）などの花粉分析成果の総括がある。それによれば、弥生時代以降になると、それまで優占していたアガシ亜属などの針葉樹林要素が減少し、マツ属やヒノキなどの温帯性針葉樹花粉が増加傾向を示すようになる。中世には準善例事象が少ないものの、マツ属・コナラ亜属などの二次林要素が増加し、草木花粉が卓越するようになり、植生に対する人為的破壊の影響を強く受けるようになっただけが推定されている。このように中世には植物破壊が進行するが、今回同定されたヒノキやアガシ亜属などに由来する花粉化石が確認されていることから、遺跡後背の山間部にはこれらの樹種が分布しており、入手可能な木材であったことが示唆される。ただし、中世以降の古植生については不明な点多が、中世以降の森林資源の変化については、今後の資料蓄積をもって評価する必要がある。
1. ヒノキ（遺物番号24）
2. ヒノキ科（遺物番号35）
3. コナラ属アカガシ亜属（遺物番号25）
   a:木口  b:径目  c:板目
引用文献


伊東 隆夫. 1998. 日本産厄木樹材の解剖学的記録 IV. 木研究資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東 隆夫. 1999. 日本産厄木樹材の解剖学的記録 V. 木研究資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

松葉 泰子. 2001a. 二葉枝遺跡出土土木製品の樹種同定. 「二葉枝遺跡発掘調査報告書 第3.5.7.8.9.12次調査」神戸市教育委員会, 141-166.


中村 弘. 2001. 兵庫県における樹種同定資料について. 兵庫県埋蔵文化財研究懇談会, 創刊号, 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査実務所, 103-121.


パリノ・サーナウェイ株式会社. 2002. 上廻遺跡出土出土木製品・炭化村の樹種. 「兵庫県文化財調査報告書第233冊神戸西バイパス開発埋蔵文化財調査報告書IV 上廻遺跡II」兵庫県教育委員会, 148-152.


Ⅳ．まとめ

（1）大橋町遺跡第2次調査の成果

今回の調査により検出された遺構は弥生時代、古墳時代、平安時代末～鎌倉時代に属し、先の第1次調査における検出遺構と時代的には異なるものであった。

弥生時代

今回の調査において約0.5m前後の長く延びる溝を十数数条確認している。溝からの出土遺物が非常に少なく、その時期については根拠が薄弱であるが、SD17における遺物の出土状況や、後述の遺構の見解を基にしたような状況下ではなかったことから、現段階で弥生時代中期に属するものと判断した。但し、第1次調査地においては弥生時代の遺構は1条のL字形に屈曲する溝が検出された以外に全く同様の遺構が検出されておらず、周辺でのこの溝群の状況については不明である。

古墳時代

古墳時代の遺構は3区の中央で検出した溝1条のみであった。この溝は第1次調査地でも確認しており、北側から南東方には一直線に掘削されていることが明らかになった。調査地理で未検出の部分もあるが、これを復元すると、現在確認されている溝の総延長は約100mとなる。

今回の調査では3区北半の中央部分でまず溝の最終埋礫であった黑色シルトを検出し、層層に繰り込んだ幅広の溝が存在することを確認していたが、遺物が全く伴わない状況であったため、後述する弥生時代と考える溝とそれ以前の自然地形に伴う溝と判断していた。その後、南側を調査した段階で古墳時代の遺物が出土したことから溝の時期が判明し、その形状が明らかになった。遺物の出土位置より、溝は5世紀中頃に掘削され、少なくとも6世紀中頃までは開口していたと考えられる。何らかの区画に伴う溝と考えられるが、その区画の基準となる遺構は今回の調査地、あるいは第1次調査地においても確認されていない。おそらくは当遺跡の西側約0.2kmに位置する松野遺跡において同時期の遺構・遺物が数多く検出されており、位置的にも何らかの関係を有するものと考えられる。

松野遺跡は長田区南部における発見の集落を含み、今回の調査地から北西へ約1km離れた地点での松野遺跡第1次調査では、豪族居館とされる掘立柱建物が多数とそれを取り囲む排棚が検出されている。一部の建物に正式検出した溝の方向軸であるN40°Wの方位で合致するものがある。また発掘前の南側に残る堅実な住居群にも方向性で共通するものが認められる。現時点で詳細な検討を加えていないため、多分に推測になるが、今回の調査地辺りが松野遺跡の外郭であるかどうか。

中世

第1次調査で中世初頭の遺構は、平安時代末～鎌倉時代前半の掘立柱建物が9棟復元され、その他の小径墓地の井戸、土坑、多数の耕作痕（縦溝）を含む溝が検出されていた。

今回の調査地における中世初頭の遺構は、1・2区の北側で検出された遺構を除くと、ほど先の調査地に近い3区の南半の範囲に集中しており、内容としては洗路跡を利用した水汲み場（SX01）と、やや離れた位置に掘削された井戸（SE01）といった主に水に関わる遺構とその周辺において検出された土坑や柱穴であった。付近に建物の存在する可能性があったが、今回の調査では明確な建物は復元できなかった。柱穴からはほとんど遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明である。落ち込みや井戸、土坑からの出土遺物は、い
図37 大横町遺跡第1・2次調査地平面図（合成図）
すれも概ね12世紀末～13世紀前半の時期に取るものであった。

3区の西側で検出したS01はこの地を貫流した流路跡である。最初の流れ込みの形成がいつ頃であるのか明確でないが、中世初頭段階には緩やかに水が流れ込む状態であったことが中位に厚く堆積したシルト層より推測される。S01の東側ではS02、SK03、SK04の3基の土壌を検出したが、南側はそれぞれの遺構が埋没した後に、その上部がS01の中層に堆積するシルト層上層の砂層により割られる。この砂層はSK04の最終堆土となる。S02をSK04が切り込む状況と合わせると、S02、SK03がやや先行して掘削されていたものと考えられる。SK04は土壌底で2枚の土壌面が出土したことや上に壊が落ちるなど、東側に大きく引込んだ流路の角を意識したものと考えられ、両端の土壌が埋没した後も機能し、S01の埋没を合わせて埋まったものと推測される。

また遺構の埋没状況に関して、S01やSK03、S02の土壌の下層は周囲からの流入土であるシルトや洪水により堆積したと考えられる砂の層で埋まっているが、その上部には一様な堆積層である黄色シルトをブロック状に含む層があり、一時期に埋め戻された感がある。S01の埋没過程、またS01南側断面で観察される2度の大きな流れ込みの痕跡がいつ頃のものかにもよるが、土壌や柱穴の検出から周辺に遺構が存在した可能性も指摘でき得るが、新たな流路の貫流や洪水のために遺構は埋め戻され、その後はS01を利用しやすいように整備し、そこに溜まる水を利用していたのではないかと現状では推測する。S01の最終埋没は中世末の段階であるが、洪水などの影響を考え、これ以降、この場所には遺構は造られず、耕作化していったものと考えられる。第1次調査においても、調査区西側で検出した遺構はにかからず柱穴の痕跡が認められ、建て替が行われたことが明らかになっているが、出土遺物の時期幅から短期間に営まれた集落と推測されており、今回検出した一部の遺構の堆土の状況はそれと大きく関連をきたさない内容と考えている。

3区では規模の大きな覆土が多かったという状況もあったが、検出した柱穴はいずれも規模、内容ともに明確なものは少なく、今回調査では第1次調査地で検出された居住域に付随するが、遺構をもたす空間ではなかったものと推測される。

(2) S01にみられる地域遺跡と思われる事象について

今回の調査で検出したS01において地震の影響を受けたと考えられる痕跡を確認した。

S01は直径約1.7mの円形の平面を検出した後に掘削を行ったが、当初は深さ0.7mまで堆積する褐色系粘質土の堆土に基盤層である黄色シルトがブロック状に混じり、埋め戻された痕跡が顕著であったこと、加えて埋め戻しの堆土を除去した灰色砂面で礫や須恵器の跡が出土したことから、この層面を成とする素掘りの井戸や溝が考えていた。

ただ掘割の壁面を構成する土は基盤層以下、いずれも比較的粘性の強い土であったが、南東部の一丸に同様の状況がなく、シルト気を帯びた堆土が壁面に引込む状況が見られた。井戸や水溜り遺構などでは掘割が露出している例が多々あるため、それに類する状況かとも考えたが、周辺の同じ程度の深度をもつ覆土でもS01と同様の砂層は確認していない。礫の出土レベルで記録作業を行った後、壁面に満ち込んで砂層の状況と掘割の形状を確認すること、及び下層の状況を確認する目的で断ち割り調査を行った。
道構の南側に1.5m四方のトレンチを設け、底とした灰色砂面まで掘り下げた。その結果、灰色砂面でやや南にずれた状況の直径約2mの円形の変色部を確認し、壁面では下部の砂が上方に延びながら、掘りの壁中に吸い込まれる状況が見られた。円形の変色部をさらに掘り進めめた結果、検出面から0.9mの深さで曲物の上面上を検出した。この結果、SE01は直径46cmの曲物を井戸とする井戸であることが明らかになった。

曲物は側板、上下の築とも非常に残りが良く、ほぼ井戸の構築当初の姿を留めるものと考えられる。但し、下段の築は側板からはずれ、上体が北西側に傾いた状態で検出された。

井戸の使用中、あるいは埋没過程における変形とも考えられたが、先述したように曲物下部の砂が壁面に吸い込まれながら上方に延び、その部分で基盤層とその下層の堆積層にびび割れのような痕跡が見られ、びび割れの間の土層は折れたように屈曲し、下方に沈み込む様子が認められた。また層の「ずれ」に伴う土層の傾きの角度、方向と曲物の傾いた方向は同じであった。

この事象の要因として地震による影響が想定され、曲物が得られた湧水層、あるいは上層の砂層が液状変化現象を引き起こした結果によるものと考えられる。

湧水層が液状化に伴い水平方向に強く揚げるとともに、上方に水と砂が噴き上げた結果、基盤層以下の層を切り裂いたようで、これにより造構土に接する基盤層にひずみが生じ、軽弱な造構土を圧迫するとともに下部の曲物に圧力をかけたものと想像される。曲物は北西側に強く傾き、南東側の下段巻が浮き上がる状態になったと考えられる。

調査区間では、この他にも柱穴の埋土に不自然な段差が認められ、SE01と同様の状況が調査区北側の近〜現代の井戸の掘削層の「ずれ」＝断層となって現れ、造構の埋土が軽弱な部分では掘削の一帯が崩落する状況が確認されている。この近〜現代の井戸の状況から、今回の調査で確認された事象は「兵庫県南部地震」に伴う地盤変動と考えられる。
また神戸市内では震災以降、地震の影響により土中の運搬が変形する例が数多く見つかっている。地震による痕跡は様々で、液状化現象に伴った増长、地滑り、断層、地割れ、至るところで確認されている。今まではこれら地震の痕跡は「慶長の大地震」に起因すると解される例が多かったが、兵庫県南部地震を経て、さらに地震痕跡の検出例が増加している。

図39 SE01出土曲物破損状況模式図

（3）弥生時代の遺構一溝の検出とその性格について

次に今回の調査において最も判断の難しかった遺構について、現状で考えられる遺構の様相について書き留めておきたい。

調査区内で幅0.5m前後の溝を数箇所検出した。出土遺物は乏しいがSD17出土の変の口縫部片から、一連の溝は弥生時代中期に属する遺構であると判断した。調査区内は従来物の基礎などとの影響を受け、溝の切り合いがあったと考えられる部分が失われ、前後関係など不明な点が多い。溝について簡単な復元作業を行い、あわせてその内容を概観する。

溝は一見すると並びや方向に規則性がないように見える。直線的に延びる溝、弧を描き延びる溝、蛇行する溝など、規則的な形態をなす部分にみられるが、直線的に延びるものも最終的に弧を描きながら収束しており、大きく弧を描く溝の一部が今回の調査区で現れたものと理解する。溝の平面的な分布は不明瞭ながら、旧地形や等高線に沿って掘削されていった可能性が高いものと考えている。中世以降の耕作による削平や早くからの市街地化に伴い、遺構の上部は既に失われている部分も多いであろうが、調査地区は北西から南東方向
への緩やかな傾斜地形となっており、基本的に等高線に沿って掘削されたと考えられる。

検出した淵には、2種類あり、淵の断面の形状において断面下位が箱型を示すもの、また全体に軽くレンズ状に堆積したものに分けられる。調査に近づいて検出した淵の断面は切り合われた位置から、先の淵の断面は箱形となっており、その後に重複する形で堆積された淵の高さはレンズ状に堆積している。形状の相違は明確であるが、重複する新たな淵が堆積されたか、あるいは掘り直しの痕跡であるかは明らかでない。淵の切り合いがほとんどないために、唯一S08が全体の状況を把握する上で鍵となる。淵は調査地全域に長く延びる一群と、南側で弧を描く一群に分けられる。S08を基準とした場合、どちらのグループの淵もS08よりも古い段階になる。しかし同時に存在していたかは明らかでない。

またこの他に現在の地割りと並行する淵を1条検出しているが、いずれの淵からも出土遺物は見られずS04とS05、SD13とSD14が交差し、検出状況からは地割りに沿う淵が古相を示すようだが、土壌が類似していることもあり、明確とはいい難しい。

図40 弥生時代の淵 推定グループリング図

弥生時代の遺構では、他にわずかながら柱穴と土坑を検出しているが、耕作跡を形成するものは考えられない。淵の性格については出土遺物が皆無に近い状態であるから、おそらくは耕作痕に伴う淵と判断するのが妥当と考えられる。土壌分析などを実施していない状況では明確な根拠に乏しいが、自然地形に沿って淵を廻らせて区画を設けるとともに水を舗装に確保する程度の耕作地があったものと考えられる。

また츠トノの遺跡周辺における弥生時代の耕作地については、妙法寺川の左岸中流域～下流域に立地する大田町遺跡、若松町遺跡において耕作痕や取水、区画溝と考えられる例が確認されている。大田町遺跡では6本の細長く連続してU字状を描く淵を検出している。
溝の幅は約0.6m、長さは一辺約16mである。若松町遺跡では5つの単位の農を伴う遺跡を検出している。復元される農の幅は約1.4m、最も長い農の長さは約19mである。どちらも住居址に近接する場所で検出された耕作層で、遺構の時期は両遺跡とも弥生時代後期に属する。比較的規模の小さな集落－居住址－の中の生業空間であると解される。今回検出した農が弥生時代中期とすれば、大橋町遺跡に近接する地域には当該期の集落は今のところ存在しない。弥生時代中期の生業域であった場合は母体となる集落は、北西約2kmに立地する茂町遺跡が候補に挙げられる。この辺りまでが集落域、また生活活動の範囲であったのか、今後の周辺での調査により明らかになるものか期待される。

図41 周辺遺跡検出の耕作に伴う溝

(4) まとめ

以上、甚だ推測の多いものとなったが、今回の調査において気付いた点と疑問の残る点について若干触れた。

大橋町遺跡は弥生時代、古墳時代、中世の遺跡と考えられるが、居住域が形成されるのは中世の一時期に限られるようである。これは先の調査と同様の結果であり、大きな変化はなかった。また集落の中には第1次調査地の西寄りの部分を考えられ、そこに一時期、9棟前後の集落の痕跡が構成される小規模な集落があったと考えられる。3区西側のSX 01がどのように流れていかにかも知れないが、さらに西側へ同時期の集落が大きく拡がる可能性は少ないと考えられる。

また各々の遺構の時期判定については、総体的に遺物の出土が少なかったことから非常に困難であった。ただ今回の第2次調査地では、住居址やそれに付随する建造物の存在は確認できなかった。遺構域の縁辺部、あるいは生業域であったと考えられる。
図42 長田区平野部微地形復元図　2000 関野豊雄『水型遺跡：長野遺跡発掘調査報告書』所収図表図を改変

各時代の状況から当該地が独立した集落であったとするならば、いずれの地域や遺跡に属する空間であるのか、現状では直接これらを証明する資料に欠ける。地理的、また検出遺構の年代は松野遺跡から集落の拡大を図った可能性が高く、両遺跡間に流路（SX 01）が形成され、洪水による被害などのためにその動きをやめてしまったものかと現状で想像をたくましくする。

図42は平成48年作成の1/2,500の地図を基準に長田区平野部の地形を復元したものである。周辺の遺跡が冲積地盤の微高地に形成されている様子が明らかである。またこの図では妙法寺川、芹薬川間の旧「蓮池」が谷状地形を呈していたことが鮮明に表れており、両河川間の遺跡の形成に少からず影響があったことを想像させる。

妙法寺川、芹薬川両河川流域には大橋町遺跡をはじめとする同様の始生時代・古墳時代・中世の集落遺跡が点在し、沖積地盤の遺跡帯状に分布する。遺跡を結ぶラインが自然堤防などの微高地にあたり、既に埋没河川となった様々な流れの影響を受けながら集落の消長があったと考えられる。

（5）あとがき

震災復興に伴いJR新長田駅を中心とする南・北両地区における震災復興事業に伴い、様々な調査が実施されてきた。これまでにも多くの新知見が得られ、人々の暮らしの様相と受け継がれている事実が明らかになりつつある。大きな揺れを被った被災地ではあるが、新しい街の歴史の創造に際して、発掘調査で得られた成果が活用されることを願う次第である。
調査地遠景（海上より）—矢印の支点が調査地周辺
1. 調査地遠景（東上空から）—矢印の交点が調査地周辺

2. 調査地周辺衛星写真
   平成10（1998）年撮影
   【神戸市行財政局航空写真データより】—白線調査地加筆
1. 1区SD01検出状況（北西から）

2. 2区SD01及びSK01検出状況（西から）
2区全景（南東から）
1. 2区SD02・03（南から）

2. 2区SD02北半（南から）
3 区垂直写真《モザイク合成》
1. 3区北半全景（北東より）《クレーン撮影》

2. 3区北半（北から）

3. 3区北半（東から）
3区南全体像（東から）《クレーン撮影》
1. SX01全景（北東から）

2. SX01中央部土層堆積状況（北から）
1. SK04全景（南西から）
2. SK04土層断面（南西から）
3. SK04上面検出状況（北西から）
4. SK04遺物出土状況（南西から）
写真図版11

1. SE01全景（南から）

2. 上層土層断面（南から）

3. 上層遺物出土状況（南から）

4. 下層埋没状況土層断面（南から）

5. 曲物出土状況（南から）
1. SD11全景（北東から）

2. 土層堆積状況及び
遺物出土状況（北西から）

3. 遺物出土状況近景（北西から）
1. SD06・07（南東から）

2. SD06断面⑤（東から）

3. SD07断面⑧（南から）
1. 3区南西部全景（北東から）

2. SD17・18西半（北東から）

3. SD13・14土層断面（西から）
SX01出土の遺物（1）
SX01出土の遺物(2)
写真図版19

SX01出土の木製品

SK04出土の遺物

SK03・04・SX02出土の遺物

SX01及び周辺土坑出土の遺物
遺構に伴わない遺物
<table>
<thead>
<tr>
<th>所収遺跡名</th>
<th>所在地</th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
</table>
| 大橋町遺跡 | 兵庫県神戸市 | 28106 | 6-32 | 34° | 135° | 2006年11月 | 第2次-1 | 140
| 周辺 | | | | | | | | | |
| 大橋町遺跡 | 向洛町 | 5-1 | 2006年11月 | 第2次-2 | 1.420
| | | | | | | | | |

### 大橋町遺跡第2次発掘調査報告書

一新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業（若松5）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007. 11. 30

発行：神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TIL. 078-322-6480

印刷：福田印刷工業株式会社
神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号
TIL. 078-811-3131

神戸市広報印刷物登録　平成18年度第185号　(広報印刷物規格 A-6類)